

---

# 武士にあらねど

和泉守兼定

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

武士にあらねど

### 【Nコード】

N7338Z

### 【作者名】

和泉守兼定

### 【あらすじ】

時は攘夷戦争最中。国の為、仲間の為、志の為戦った男達……  
攘夷志士。

その中に鬼兵隊と並び恐れられた組織があった。名を……『新選組』。彼らが戦うは……何が為。

ここでの歴史に関する発言は通説等と異なり信憑性に欠ける発言

を致す恐れがありますが、小説だと思い、何卒ご容赦いただきたく  
思います。

**試衛館（前書き）**

初投稿です

どうか御手柔らかにお願い致します

## 試衛館

ここは武蔵国の田舎・多摩にある人気の少ない剣術道場。名を『試衛館』えいかん。ここにいるのは門下生数名と食客達。門下生より食客が多い一風変わった道場である。

今道場内で素振りしている人が一人いて、他の人達はその音をBG M代わりに会話を楽しんでいる。

不意に

「なあ、聞いたか」

と、一人の男が口を開いた。

この男は永倉新八。試衛館の食客の一人で見た目は確実に体育会系ながら、その実頭が良い。

「突然 聞いたか 何て言われて何の事か分かるわけ無いじゃないですか」

笑いながら新八の言葉を幼顔の男が返す。

この男は沖田総司若いながらも天然理心流てんねんりしんりゅうの免許皆伝を果たした相  
当な剣の使い手である。

「ああ… そうだな

実はな ここに来る前、幕府からのお達しを聞いてな……」

新八はそこで一度言葉を切る。話を聞いているものは一同新八を見

つめている。素振りの音も止まっていた。

「近々幕府が浪士集めて戦に出す隊を作るらしいんだ」

「つまり 徴兵か」

新八の言葉を切れ長な男が簡単に言い直す。

この男は斎藤一。この中では最年少の食客でかなりの剣の使い手だが、一癖も二癖もある文字通りの強者である。

「簡単に言っちまうとな」

口角を上げ新八は一の方を見る。

「だったら何なんだよ 新八」

縁側で襟元を大胆に開けながら日向ぼっこしている長身の男が首だけ新八の方を向け尋ねた。

この男は原田左之介。剣術道場の食客ながら槍術の使い手で、勘だけを便りに生きているような男である。

「だからこれに参加しねえかと思って、持ってきたわけよ」

「その話俺も聞いた」

何でも 腕に覚えがあれば誰でも良いんだと

新八に賛同するかのように一より少し幼めの顔の男が言った。

この男は藤堂平助。一と同じ年の食客で北斗一刀流の使い手で、後に真選組で謀反を起こした伊東鴨太郎とも面識がある。

「おい 永倉

それって何処に出兵すんだ」

木刀を右手に暫く立って聞いていた男が新八に尋ねた。

この男は土方歳三。喧嘩の作戦となれば頼れる頭脳派で、泣かした

女は数知れない二枚目である。

「今時戦と言ったらあれしかあるめえよ 土方さん」

新八は歳三の方を首だけで振り返り笑って言った。

「攘夷戦争だ」

「そうか」

ついに幕府は本腰をいれたと言うわけか

これは行くしかあるまい

なあ トシ」

黙って話を聞いていた曲線を探すのが大変なほど四角い顔をした男  
が大きな口で笑いながら、歳三に振った。

この男は近藤勇。近藤家の養子で天然理心流の師範を勤め、試衛館  
の経営難の一端は彼の人の良さが招いた食客が要因である。

「まあいいか

楽しい喧嘩になりそうだ」

勇に振られ、歳三は肩に掛かった手拭いで汗を拭き、笑いながら言  
った。その顔は喧嘩をする時のそれと同じである。

「戦争を喧嘩と言える土方さんは凄いと思います

私には言えませんが」

総司はカラカラと笑いながら歳三に言った。

「馬鹿にしてんのか」

歳三は勘に障ったらしく眉間に皺を寄せ、語気を強める。しかし総  
司の表情からは楽しんでる風しか感じられない。

完全に本題からずれたことに新八は溜め息をつき、切り出した。

「ともかく

明日にでも発たなきや確実に間に合う保証はない」

皆一様に口を閉じる。勇が何か言うのだろうと待っているのだ。

「なら今日はもう切り上げて、参加する者は明朝辰の刻迄に道場前

に集合だ

刻限になれば構わず出発する  
きちんと刀 用意しておけよ」  
その場の全員が頷いた。

と、そこへ、白髪混じりの男が茶を人数分持ってきた。

この男は井上源三郎。この中では最年長で近藤家に二代に渡って手  
解きを受けていて、勇に負けず劣らずの優しい男である。

一同は同じ話をする羽目になるのかと源三郎を見て溜め息をついた。  
源三郎は首を傾げ 何ですか と笑顔で尋ねた。

歳三は頑張って説明する勇と新八をよそに帰り支度を始めた。

これが後に新選組で局長・副長・副長助勤を勤める者達である

## 試衛館（後書き）

初めまして

私、和泉守兼定と申します

完全に新選組の土方様の刀からとっています　この名前……

新選組ファンの方　先にお詫び申し上げます

えっと　この小説はザツクリ言いますと

『攘夷戦争に新選組参加させたら面白いかな

どうせなら組長とかは鳥羽伏見メンバーに近藤・沖田・藤堂を足した面子でいいや』と言った完全にノリで考えたものです

すみません

これから頑張って投稿していきますので

暖かい目で見守っていただければ光栄です

次回は真選組の　さんが登場です

出立前 其ノ一（前書き）

二話目です

時軸は前話の日の夜の話です

## 出立前 其ノ一

ここは試衛館道場から繋がる母屋。先程まで家族で食卓を囲んで、夕食をとっていたところである。

現在、居間には勇と義父の近藤周作、そして義弟の勲がいる。

「あの…」

義父上ちちうへ

勇は周作の前に両手を床につき、軽く頭を下げ口を開いた。

「なんだ 改まって」

そう言いながら周作は勇の方に体を向けた。

「……実は

明日 江戸に発つことに決めたのです」

「そうなんですか 義兄上あにうへ！」

勇が周作に言ったことを側で聞いていた勲が身を乗り出した。しかし周作は勲の方を静かに見つめた。

「勲は黙っていなさい」

「……………」

大きな声で言ったのではないのだが、勲はこの一言で押し黙った。

周作は顔を勇に戻す。

「……江戸に発つか」

「はい」

「そうか」

一瞬の沈黙。

「えっ？」

勇は思わず間の抜けた声を出す。

「なんだ」

周作は まだあるのか と言いたげな顔で勇を見つめる。そんな表情に気が抜けたのか、勇は頭を掻く。

「ええつと……」

それだけですか？」

「他に何を期待していた  
激励か？説教か？」

「……いえ」

勇は周作から目を背け、心の中で どちらも嫌だが…… と、呟いた。

周作は暫く勇を見つめた後、膝を一回叩き、口を開いた。

「勝太……否 勇自身が本気で考え決めたことならば反対はすまい」  
「あつ……」

ありがとうございます！」 勇は深々と頭を下げた後、居間を出て、自らの部屋に帰った。

その後、周作も居間を出ていき、勲一人が居間に残った。が、勲もまた部屋を出、居間には誰もいなくなつた。

「義兄上……」

「どうした 勲」

勇が部屋で出立準備をしているところに、勲が入ってきた。

「……」

入ってきたは良いが、勲は正座して座つたまま一向に切り出していない。

「なんだ

言いづらいことでも言いに来たか」

痺れを切らした勇が手を止め、問い掛ける。すると勲は漸く重たい口を開いた。

「俺も……」

俺も連れてつてくれ！」

「断る」

「即答っ!？」

勇気を出して言った申し出に間髪入れずに断られたことに勲は反射的に突っ込んだ。

「もっ……もう少し考えてくれたって……」

「だめだ」

そう言うと勇はまた手を動かし始める。

「なんで!」

勲は身を乗り出し尋ねる。勇は深く息をつくど、呆れたように口を開く。

「お前がもう少しでつかくなって、俺くらいになりゃあ

やりたいことの二つや三つは見付かるし

好きな女も見付かるだろうよ」

「義兄上は？」

思いがけない発言に勲は尋ねた。勇から女の類いの話を聞いたことがないからだ。

「俺あ 駄目だ

期を逸した上に周りは俺より良い男ばかりだ

諦めた」

勇は弱々しく勲に笑いかけた。

「全然説得力無いから!

諦めたって何!？」

勲は全力で突っ込む余り、床を思いつきり叩いた。

「勇 いるか？」

突然、障子の向こうから周作の声が聞こえる。

「はい」

勲は先程の事もあり、黙る。勇の返事を聞いた周作は障子戸を開ける。

「なんだ勲もいんのか」

「俺いぢやいけない!？」



勇は顔を上げ、周作を見る。周作は今までに無いほどの優しい顔をしていた。

「頑張つてこいよ」

表情相応の柔らかい声で周作は声をかける。

勇は額が畳につくかつかないか位のところまで頭を下げた。

「有り…難く…頂戴…いまし…ます…っ」

勇の声に何時ものような芯の太さは感じられない、途切れ途切れで弱々しい声だった。

「泣きながら言う奴があるか

明日は皆の前で泣くなよ

男の別れに涙は不要だぞ」

そう。勇は泣いていたのである。畳にパタパタと涙が落ちている。

しかし、周作の頬にも涙が伝っていた。

「はい…っ！」

勇は絞り出すように、呟いた。

## 出立前 其ノ一（後書き）

銀さん達全くの放置になっています。いずれ一回出します。

なかなか進まなくてすみません。戦場にすら行ってませんね……  
戦場に出たら坂本さん登場なのですが………  
どうか暫しのご辛抱を！！

さて、今回は近藤篇でした。刀手に入れるだけで大変です。勲さんが完全に邪魔者でした……。もっと良い役にしてあげれば良かったのかもしれない。

作中の勇さんの義父の近藤周作の元ネタは『近藤周助』改め『近藤周斎』です。晋作が晋助になったなら逆も有りかと思ひまして……  
……。決して玄武館の千葉周作は関係ありません。

次回は鬼の 達のお話です。

感想・質問お待ちしております。

出立前 其ノ二(前書き)

時軸は前話付近の頃です

## 出立前 其ノ二

ここは多摩でも有名な豪商の家。姓は土方。石田散薬と言つ薬を売っている。効き目は眉唾物だが……。

その家の戸が開けられる。開けたのは歳三だ。

「あら 歳三じゃない」

戸を開けた歳三に声をかけたのは長女のよだ。

のよは目の見えない為五郎のため家に残っている。因みに未婚者である。

トントンと調子良く包丁を動かしていく。

「ああ 只今」

草鞋を脱ぎながら返事をする。

「歳三か」

卓袱台に着いて光の宿さない双眸を歳三に向けたのは長男の為五郎である。

為五郎は弟妹に差別すること無く優しく接してくれる人で、歳三の仕事の面倒も見てくれた。失明の原因は言わずもがな。

「為兄……」

「只今」

歳三は為五郎の向かいに座る。

「そろそろ晩飯だな」

「ええ」

為五郎は顔をのよに向け尋ねると、彼女は顔を向けることなく答える。

「一緒に食つか 歳三」

「ああ」

歳三は為五郎に薄く笑いかけながら答えた。

食卓は静かなもの。為五郎・のよ・歳三の三人だけである。ここにいない兄弟姉妹は奉公や婿入り・嫁入りでいないのだ。いや、これでは語弊があつた。末の弟以外のここにいない者、である。末の弟もとい十四郎はどつかふらつていて、家には顔をちつとも出さないだけである。

静まり返つて食事の音しかない中、不意に為五郎が口を開く。

「歳三」

しかし、歳三は返事をことはしない。黙つて食事を続けている。為五郎は返事をしてこないことを気にも止めず話を続ける。

「何処か行く予定あるか」

歳三は茶碗を卓袱台に置き、箸を箸置きに置いてから為五郎を見た。

「なんだよ　いきなり」

「何となくだ」

茶を啜りながら為五郎は言う。歳三の眉間に僅かに皺が刻まれる。のよは食器を片付け始める為、席を立つ。

「目え見えなくなつた分

心でも読めるようになつたか」

如何わしいものを見るような目で歳三は為五郎を見つめる。

「さあな」

彼は一度光のない双眸を開き天井を見た後、にっこり笑つて歳三を見た。

「意地悪だなあ　相変わらず為兄は」

そう言う歳三の表情は何処か柔らかい。眉間の皺もいつしか無くなつている。

「ははっ」

為五郎は笑つ。しかし、腹の底からで無い、曖昧な笑いである。

歳三は茶を飲みきり、湯呑みを置く。カタッ、と置く音がやけに室内に響く。

余韻が消えた静寂の中、歳三は口を開いた。

「明日江戸に発つ

そのまま攘夷戦争に出ると思う」

のよは驚いたように歳三を振り返る。為五郎も驚いて一度目を開けるがまた閉じ、息を着いた。

「そうか……」

つい最近な 刀手に入れたんだ。『ノサダ』って言うらしいんだが……

目の見えねえてめえが持つてても意味はねえ使つてやれ」

歳三は驚きを隠せない。『ノサダ』と言うのは二代兼定の打つた和泉守兼定の通称で、虎鉄の切れ味に負けるとも劣らない名刀である。そんな刀を持つていることもそうだが、歳三はそれよりもそんな名刀をあさつりと譲つてくれることの方に驚いていた。

「良いのかよ……」

いつの間にか歳三はそう呟いていた。

為五郎は歳三の呟きにニヤリと口角を上げる。

「刀は使われるか鑑賞されるかで生きるってもんだ

俺にはどちらもできんからな」

そう言つた為五郎は床の間を指差す。

「刀は床の間のだ

持つてけ」

「あんがとよ 為兄」

歳三はそう言つと刀を手にする。手にずっしりと重さを感じた。今までに感じた刀の重さよりも重く感じたのである。

歳三は手にとつた刀を腰に差すと土間に降り、草鞋を履きはじめる。

「何処行くの 歳三

明日早くないの？」

のよは前掛けで手を拭きながら尋ねる。

「十四郎の所に行くてくる。」

あいつのことだから明日は見送り来なさそうだしよ」

そう言つと歳三は戸に手を掛ける。のよが為五郎の方を見ると彼はそれを許せ　と言つように頷いていた。

「長居はしないのよ」

のよの溜め息混じりの言葉に歳三は頷き、闇の中に走っていった。

歳三が着いたのは野原。そこが一番大きい石の上に目的の人物が座つて星空を見上げていた。歳三はその背後に立ち、声をかける。

「よう」

振り返つたのは末の弟の十四郎である。世間からは『バラガキのトシ』と呼ばれている、俗に言つ悪餓鬼である。

「歳兄……」

なんだよ　連れ戻しに来たのかよ」

十四郎がそう言い放つと、歳三は笑つて隣に座つた。

「俺が一度だつてお前を連れ戻しに来たことあつたか」

十四郎は暫く考える。確かに歳三は何処に居ても何をしていても、一度だつて自分を連れ戻しに来たことはなかつた。それどころか逆に庇つて兄姉を説得してくれた程だ。十四郎がその理由を知る由はないのだが……。

「じゃあ　なんだよ」

十四郎は歳三に尋ねる。すると歳三はニカリと笑つた。

「明日江戸に発つ

それを言いにな」

「だから刀差してんのか」

そう言つて十四郎は歳三の腰にある刀を指差す。歳三は左の袖を上げ、刀を目に捉える。

「まあ……な

因みに連れていかんぞ」

歳三はそう言いながら煙草を鉄でできた煙草入から出し、口に啜える。懐や袖を探り、ライターを取り出す。

「言うと思った

良い、別に。

自分で大将見つけて勝手に行くからよ」

煙草に火を点けながら聞いていた歳三は少し驚いた顔をしてから十四郎の頭をガシガシと撫でた。

「それでこそ俺の弟だ」

何時もなら抵抗する十四郎が抵抗しないのを不思議に思った歳三は手を止める。すると十四郎は呟くように言葉を紡いだ。

「だからそんな時は……………」

「良いぜ」

十四郎の言葉を全て聞かずに歳三は返事をする。十四郎は俯かせていた顔を上げた。

「だからこの刀に身合うだけの男になれよ」

歳三は十四郎の胸に拳を当て、笑いながら言った。

「……………歳兄」

「なんだ」

己をじっと見て尋ねる十四郎を横目に見ながら歳三は紫煙を吐く。煙はゆっくりと広がり消えていった。

「煙い」

十四郎はそう言って眉間に皺を寄せる。歳三は暫く目線を逸らす。確かに未成年の前での喫煙は控えた方が良かったか と思った。

「何時かお前にもこの煙草の美味さが分かるようになるさ」

彼は笑ってそう誤魔化した。しかし頬には冷や汗が垂れていた。

## 出立前 其ノ二（後書き）

今回は土方篇でした。未成年なので煙草の美味しさも分からなければ、煙草のハマり方も分かりません。でも、多分最初は煙かっただろうと思ひ十四郎さんにはああ言ってもらいました。

作中の のよさんの 元ネタは歳三さんのお姉さんの『のぶ』です。佐藤彦五郎さんと結婚した方ですね。歳三さんが函館から小姓の市村鉄之助に手紙と写真を渡して届けさせた送り先です。確か……。記憶が曖昧ですみません。ちゃんと勉強します。

実は本文書いたときは本当に現実でも彼が持っていた和泉守兼定は二代兼定だと思っていました。調べてみたら『ノサダ』じゃありませんでした。十一代兼定である上に手に入れたのは多摩ではなく京都でした。

申し訳ありません！！

完全に司馬 太郎著『燃えよ』の感覚で書いていました。

この中ではもう『ノサダ』で通してしまいます。ご了承ください。

今回は近藤・土方と来たらこの人！の話です。

感想・質問お待ちしております

出立前 其ノ三(前書き)

明けましておめでとございます

今年一年『武士にあらねど』をよろしくお願い申し上げます

そして今年一年皆様にとって良い年でありますことをお祈り申し上げます

時軸は前話付近の頃です

### 出立前 其ノ三

ここはとある藩の下屋敷。その一室で道場から帰ってきた総司は頭を悩ませていた。悩みの種は刀の入手のことである。

「さて、と……」

どうしようかな……」

そう呟いてみるも解決策は浮かばない。うんうんと唸っていると、襖が音も無く開いた。

「あら 帰っていたの」

声を掛けてきたのは沖田家の次女・みつである。因みに既婚者である。

「姉上……」

すみません

先程帰った所なんです」

総司はみつの方に向き直し頭を下げた。

「そうなの

気付かなくてごめんね

今 ミツバちゃんと総悟君が来てるの

挨拶しなさいよ」

そう言うともつは部屋を出ていこうとする。が、廊下に出たところで足を止める。それに気付いた総司が顔をあげる。みつは肩越しに顔だけを向け、夕食の用意できてるわよ と言った。総司が はあゝい と返事をするともつは笑顔を見せ去っていった。

居間に行くと部屋の中には従妹のミツバと従弟の総悟、そして義兄

の麟太郎がいた。

麟太郎はみつの夫で旧姓を井上と言った。当時九つだった総司の変わりに家督を次ぐ為当時十四だったみつに婿入りした実質この家の家長である。

「こんばんは

ミツバちゃん 総悟」

総司が声を掛けると、ミツバは総司を見上げた。

「ええ お邪魔してます」

対する総悟は ふんっ と鼻をならし顔を背ける。相変わらずの正反対の反応に総司は笑った。

「駄目でしょ 総ちゃん  
ちゃんと挨拶しなくちゃ」

ミツバに注意されようとも総悟は挨拶しようとしなかった。

「お帰り」

総司は声の主へと顔を向ける。その声の主は笑っていた。

「只今 麟太郎さん」

総司がそう返したところでみつが食事を運んできた。総司も手伝いをと急須から湯飲み茶を注ぐ。

「さあ 頂こうか」

麟太郎がそう言った後、皆で口を揃えて いただきます と言った。

「ねえ ミツバちゃん」

食事を終え団欒を楽しんでいたミツバに、暫く黙って茶を啜っていた総司が声をかける。

「はい？」

ミツバは顔を総司に向ける。皆の目も総司に向いた。

「刀 持ってない？」

何の脈絡もなく突然発せられた言葉に誰も反応できずキョトンとしている。その反応に総司は首をかしげる。最初にハツとして気が付いた麟太郎が総司に尋ねた。

「総司君？ 突然どうしたんだい？」

声を聞いて回転していなかった頭が再起動した他の人達も賛同する。総司は困ったように頭を掻いた。

「いやあ 急に明日刀が要りようになりまして……」

私個人のも無ければ

この家のも無いでしょ」

そこで言葉を切り、ミツバを見る。

「だから私ですか……」

ミツバは困ったように呟いた。

「ありますか？」

優しい声でミツバに訪ねると間髪入れずに子供の声が耳に届いた。

「何言ってるんだよ

そんなもの有ったらとくに僕が使って あんた始末してんだろ」

座高の低い総悟を見下ろすような形で総司は笑いかけた。

「言うと思ってたよ 総悟」

そう言つと総司の頭をグシャグシャと撫でた。

「……………」

「どうしたんですか 麟太郎さん」

顎に手を当て、黙って悩んでいる夫に気付いたみつは麟太郎に声をかける。

「難しい顔してますよ」

みつの言葉で麟太郎を見た総司は声をかける。

なかなか反応を見せなかつた麟太郎が顔を上げ、総司を見た。

「刀なら…………… 何でも良いか？」

話が読めず総司は二 三度瞬きをする。

「良いですけど……………」

模擬刀は困りますよ  
人を切るんですから」

麟太郎をからかってみるも総司の頭の上にはクエスチョンマークが  
幾つか浮遊している。

「確か……………」

丁度一振りだけ

行く宛の無い刀があったと思うのだが……………」

「あるんですか!？」

麟太郎の発言に総司は思わず机にてを置き、身を乗り出す。

「少し待っている

今 持ってくる」

そう言うと麟太郎は席を立ち、部屋を出た。総司は座り直してから  
最初に聞けば良かったなと後悔したのだった

「これだ」

戻ってきた麟太郎の頭には埃が乗っていた。麟太郎は総司に持って  
きた刀を渡す。

「では 失礼して……………」

総司は刀を半分のところまで抜く。

刃には一点の曇りもなく、鈍く光を返した。

「きれいですね」

「確かに 曇りがない」

隣から覗き込んだ総悟と総司が率直な感想を口にする。

「それは『菊一文字則宗』」

七百年前に打たれた名刀だ。」

総司は刀を鞘に納める。キンツ と言う鏗鳴りが起こる。総司は刀  
を己の正面に置いた。

「良いんですか 私が血で汚しても」

心配そうな顔をする総司に麟太郎は笑顔を向ける。

「構わないだろう 多分」

「多分ってなんですか」

突っ込みにより空気は一気に軽いものとなった。

刀を己の右側に置いたとき、後ろで結び上げた髪が引かれていることに気付いた総司は目で引いてる手を追って顔を向けると、髪を引いていたのは総悟だった。

「おい 総司」

「なんだい」

総司は手を離させ優しい笑顔を向ける。対する総悟は睨み上げている。

「お前が死んだらそれよこしなせい」

総司は一度驚いた顔をした後、少し悩んで見せた。ミツバは突然の不謹慎な発言にわたわたしている。総司は総悟の頭に左手を乗せた。「どうか」

まあ 戦場に出るのだから死ぬかもしれないし……」

突如投下された爆弾に誰もが言葉を失った。

「戦場……って……」

どう……どういう……こと？」

どうにか口から出た言葉も途切れ途切れにしかならない。

総司は声の主であるみつを見る。

「あれ？ 言いませんでしたっけ

明日江戸に上って

それから攘夷戦争に行くみたいです」

結構大切なことを相変わらずの軽口で言っただけ。カラカラ笑う総司に 初耳よ とみつが伝えると、と一度驚いていたが直ぐにいつもの笑顔に戻った。

「すみません

じゃあ 今言っただけで」

そう言った総司に麟太郎は僅かに恐怖を感じていた。戦争に行くと言うことは今生の別れとも知れないにも関わらず、友達の家に泊まりに行くこと言い忘れた。といった風に言つてのけた義弟が今まで見てきた彼と異なつて見えたのだ。これがきつと総司の凄いとこるなのだろう。

「刀はどうなんですかい」

総悟は己の頭に乗つたままの総司の手を払い言った。

「良いよ

生きて帰ろうが

死んで帰ろうが

ちゃんとあげるよ 多分」

「多分ってなんですかい」気の抜けた返事に総悟は転けた。総司はまたカラカラと笑つて見せた。

### 出立前 其ノ三（後書き）

2012年最初の今回は沖田篇でした。全く総悟がDSではないです。総司が始終笑ってますね。

誰か私に文才を！！

と 叫びたくなります。

作中の沖田麟太郎さんですが元ネタは『沖田林太郎』さんです。漢字が一緒でもけて『勝海舟』こと『勝麟太郎』ではありません。いくら頭を捻っても出てこないのが漢字だけ変えたらこうなってます。良かったです。

菊一文字則宗は確実に武州では持っていません。京都である日、刀を打ちに出したとき代わりに渡されたのが則宗で、結局総司が譲ってもらったらしいのです。

（司馬 太郎『新選組血風』より）

総司さんにはやっぱり則宗をとこんな形になりました。

今回はいよいよ武州を発ちます。

感想・質問お待ちしております

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7338z/>

---

武士にあらねど

2012年1月1日01時45分発行